

I 研究のねらい

テーマ「時代に対応した魅力ある岩手県の農業教育のあり方」のキーワードは「時代」であり、このとらえ方で考え方は変わる可能性がある。

「時代」とは

1 「倫理観」の低下した社会

- 食品の偽装表示や期限切れ食品の流用
- 「倫理観」の低下による凶悪な犯罪の増加

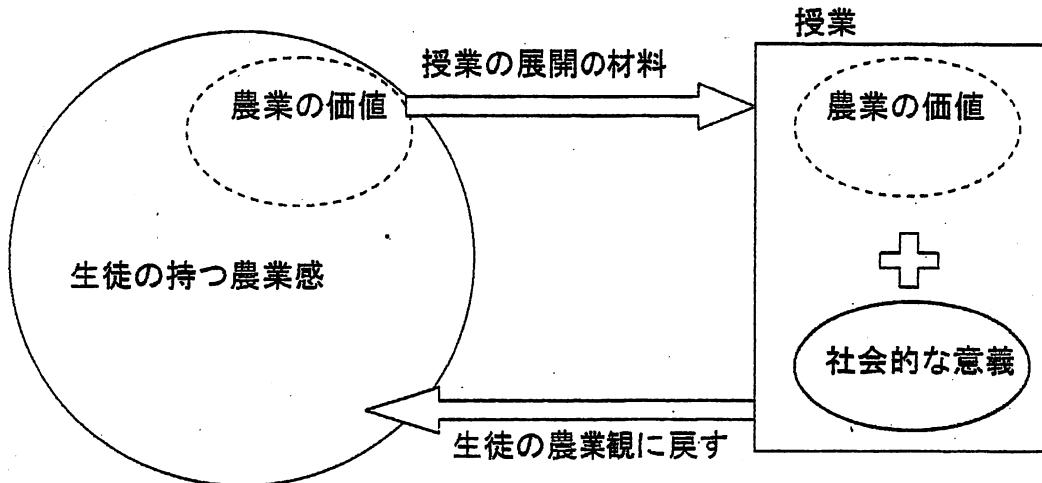
2 環境を配慮した教育

- 環境保全型農業の推進
- 安心、安全な農業生産物の流通・ブランド化

これらの話は、岩手県にも該当すると考えられる。今回の研究のねらいとして、以上の2つの問題点をどのように教科「農業」を活用して教育していくかという点に絞って検討した。

II 研究の方法・内容・分析

1 生徒の考える農業について分析し、その農業感を活用。

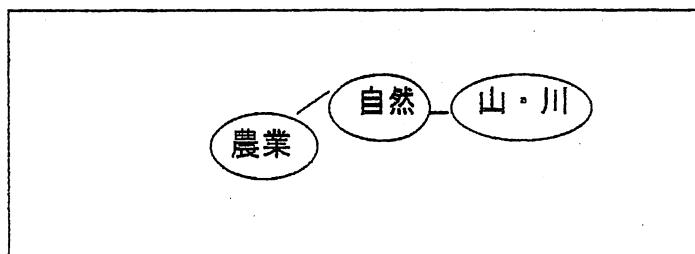


教師の一方的な価値を授業の中で入れるのではなく、生徒の言葉や感覚を活用。

2 生徒の価値観・農業への考え方を知る方法

生徒の農業の価値観を得るために、**マインドマップ**を使用。

【マインドマップの作成】

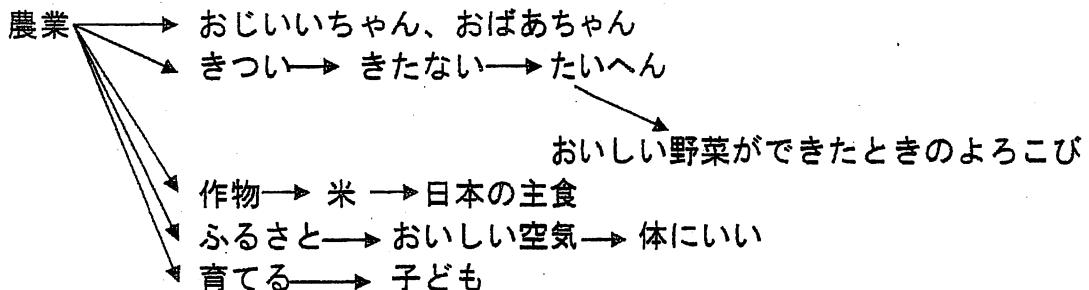


注意：生徒の感じたことをそのまま記入させる。

ふざけたり、適当なことを記入する生徒もいるが、それも記入させる。

↓
生徒の本当の農業観を知るため

① 生徒の農業観



- ・生徒の農業観として、プラスイメージのものが多い。
- ・ふるさとやおじいさん、おばあさんなど、懐かしさを感じているようだ。
- ・日本の主食である米や野菜、牛など、人間が生きていくために必要であることの認識ができている。しかし、社会的な重要性までは、発展していない。

2 生徒の農業観 → 農業の社会的な意義や役割を伝え考えさせる。
→ 農業の重要性を認識

「きつい、きたない、たいへん」→「おいしい野菜ができたよろこび」

“よろこび”って・・・本当か？

① 実習により、野菜を育て、収穫させ、食べさせる。(体験)



② つくった野菜をどのように販売するのか？(マーケティング)

① 生徒の直観を農業実習という体験を通して学習する。さらに、問題を見いだし、解決しようとする「発見学習」を行うことができる。

また、生物とふれあうことで、セラピー効果が期待できる。

(私の体験として、生物を担当する生徒は優しい感じがする。)

【ブルーナーの発見学習】

発見学習のプロセスとして、直観と検証を重視。

教師の役割は、児童・生徒を問題発見とその解決にむかわせることであり、そのために系統的な補助を行うことである。生徒の自らの活動を重視し、自己学習の能力をめざしつつ、科学の基本概念・学問の構造のはっきりと示すこと。

野菜を栽培している中で、生徒に考えて欲しいことが、環境保全型農業である。農業のイメージに「体に良い」という言葉があった。

同じ土壤を活用し、長い期間農業を行っていくためには、土壤をいかに保つかが重要になってくる。そこで、持続的な農業を学習しなければならない。



9月にJICA事業で西アフリカに研修に行ったときの話をした。西アフリカでは、中国の指導の下、化学肥料を中心に活用した栽培する方法を行っていた。地下水の汚染や土壤汚染などの影響を考えさせた。

② マーケティングを学習するさせる。

農学は、生物学と違い、人間中心の学問である。つくった野菜をどのような流通により、社会に放出していくかを考えさせる。ただ、売ったのでは、儲からない。そこで、マーケティングを学習することで、社会と農業の関連を学習させる。

III まとめ

教材を使用するとき、生徒の考え（生徒の農業観）をマインドマップの活用により指導することで、興味関心を引き出すことができた。

実習を通して考えさせることで、普段食べている野菜を違う視点から見せることができた。

流通を考えさせることで、農業と社会のつながりを現すことができた。

教科「農業」により、「産業人の育成」、「人格育成」を行いたい。

農業の担い手育成はもちろんのこと、農業という教科を活用して、農業とはかけ離れた職業に就いたとしても、高校時代に学習した内容は、必ず生きてくると考えられる。高校生がいつか大人になり、職場の環境や家庭の中で子どもに伝えるようながあれば、農業教員としてクリアーしたように考えられる。

生徒の農業観で、「農業→育てる→子ども」が印象的である。

IV 課題

教科「農業」と農場のバランスをとるのが難しい。

農場予算を確保しつつ、教材として維持管理していくのが困難だと感じている。